

支援者による報告2 -

家族内観の有効性に関する調査

～第1報、予備調査の結果～

医療法人耕仁会札幌太田病院 内観療法課

奥村弓恵、遠田真弓、佐藤昌史、篠田崇次、根本忠典、太田健介、太田耕平

1. はじめに

当院では、病棟内・内観療法修了後、若い症例には原則的に家族内観を実施している。内観療法での気付きの相互確認、家族関係の回復、絆の強化に活かし、再発予防、健全な家族関係の成長を目指している。当院では、平成19年度の内観療法修了者543例中、152例(28%)に家族内観を実施し、実施経過を〔家族内観記録〕に記している。現在、予後調査を実行中であるが、患者属性など予備調査結果を報告する。

2. 当院の家族内観の方法

患者の内観療法開始時、家族にも記録内観を依頼し、家族全体の協力を得ることに努めている。家族内観は、患者の内観修了時に実施し、家族相互の感謝と反省、今後の相互扶助、連帯と独立などを語り合う。そして、手、足、背中などのスキンシップを行ない、実感、共感を確かめ合う。その後、患者、家族に気づきをレポートで提出してもらう。これらのシステム化が治療効果を高めている。

3. 調査方法

対象は、平成19年度に当院で家族内観を実施した152例中99例(平成19年10月～平成20年3月までの全家族内観修了者対象)。患者属性(性別、年齢、疾患、家族構成、結婚歴)、内観方法・場所、家族の記録内観実施の有無、参加者、実施時間、スキンシップ実施の有無、情動体験の有無などにつき「家族内観記録」の調査を行った。今回は、家族療法の必要性の高い10歳代の症例(30例)において、施行後の感想レポートの内容を分類し、質的な検討を行なった。

4. 結果

家族内観を受けた患者の性別は、男性48%、女性52%。年齢は10歳代30%、20歳代17%、30歳代27%、40歳代7%、50歳代10%、60歳代8%、70歳代1%。疾患(ICD-10)は、F1依存症26%、F2統合失調症8%、F3気分障害27%、F4神経症性障害(身体化障害など)9%、F5摂食障害5%、F6人格および行動障害11%、F9小児・青年期の行動障害13%。

支援者による報告2 -

家族構成は両親健在62%、父母の離婚あり13%、父死亡13%、母死亡1%、両親死亡11%。父母の離婚については、10歳代では45%であった。

患者本人の結婚歴は、未婚65%、既婚28%、離婚7%。内観方法は集中72%、ゆったり9%、ゆったりから集中移行9%、三日内観9%、集中からゆったり移行1%。内観場所は、内観室68%、自室14%、保護室8%。家族へ事前の記録内観の依頼はあり99%、不明1%。家族内観参加者は父母のみ34%、母のみ21%、父のみ3%、兄弟13%、配偶者19%、子7%、祖父母1%、義父母2%。実施時間(3つのコースから患者、家族が選択)は60分以上43%、30~60分9%、30分48%。家族内観時のスキップの実施93%、実施せず7%。情動体験は、本人家族共にあり42%、本人のみ11%、家族のみ25%、共になし22%であった。

10歳代の症例における終了後の感想を分類した結果について、主なものを挙げる。まず本人は「家族の気持ちが変わった」など相手理解に関する内容が多く(63%)、次いで「言いたいことを言うことができた」など自己表出に関する内容もあった(43%)。親の感想では「親がどうあるべきかに気づいた」など親子関係の直面化に関する内容が最も多く(70%)、「きちんと話し合っていなかった」など対話不足を認識した内容もまた多く見られた(63%)。また、本人、家族共に「考えを聞くことができた」という相手理解に関する気づきが多く(47%)、全体的に相互信頼、理解につながる内容が多かった。

5. 考察

患者が内観療法で得た気づきを家族と共有することにより、家族間の相互理解、信頼関係の回復、健全化に役立つと考えられる。その際、家族も記録内観終了後実施すれば、より患者を受け入れ易くなり、効果が高まると考えている。

10歳代の症例では、両親が離婚している割合が高いことから、家族療法の重要性がうかがえる。今回の検討からは、家族内観が家族関係の改善に有効であることが推定できる。現在、この仮説を検証すべく予後調査を開始している。1年予後の調査から、家族内観の有効性や患者属性、実施方法と有効性の関連について報告する予定である。今回はその前段階として、患者属性など予備調査の結果を報告する。